

教育方法としての記憶術の受容と展開 －エラスムスを中心に

大川 なつか^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

西洋において記憶術は、修辞学の一つとして古い歴史をもつ。しかし、我が国の西洋教育史において、記憶術はこれまであまり着目されてこなかった。そこで本稿では、記憶術の歴史をエラスムスにみる教育方法を中心に検討する。キケロの記憶術は、クインテリアヌスによって批判的に受け入れられ、エラスムスによって受け継がれる。他方、エラスムスは、キケロ主義者であり、また新プラトン主義者でもあったカミッロと記憶術を巡って対立する。16世紀当時、彼らの論争は、ルネサンス期の記憶術の在り方において関心を集めたが、その影響は、17世紀に初の子ども向け絵入り教科書『世界図絵』を出版したコメニウスの中に見て取ることができる。

【キーワード】

エラスムス、コメニウス、記憶術、子ども向け視覚教材

はじめに

教育思想史上、或いは幼児教育史上、近代教授学の祖と言われているコメニウス (Johannes Amos Comenius, 1592-1670) は、初の子ども向け絵入り教科書『世界図絵』(*Orbis pictus*, 1658年)を出版している。この視覚教材の先駆的試みは、16世紀を代表する人文主義者エラスムス (Desiderius Erasmus, 1466-1536) から影響を受けているとされる⁽¹⁾。本稿は、子どもが学習内容を文字と図像 (イメージ) を用いて習得していく方法を「記憶術」(*Ars memorativa*) という視点から

捉え直そうとする試みである。

記憶術の歴史は古く、古典古代ギリシア・ローマ時代にまで遡る。古典古代において記憶術は、雄弁家が聴衆の前でよどみなく且つ説得力ある言葉を用いて演説を行うために重要な位置を占めていた。弁論家の教育において、記憶力のある人は徳ある人と同義とされたため、記憶術は中世を経て、ルネサンス期になっても修辞学の一つとして重視された。

他方、記憶術そのものに関する研究は、実のところ歴史が浅い。代表的なものとしては、フランセス・イエイツの『記憶術』(1966年)⁽²⁾やパオロ・ロッシの『普遍の鍵』(1960年)⁽³⁾がある。続いてカラザースの『記憶術と書物—中世ヨーロッパの情報文化』(1990年)⁽⁴⁾、ボルツォーニの『記憶の

<連絡先>

大川 なつか n-okawa@shohoku.ac.jp

部屋 印刷時代の文学的一図像学的モデル』(1995年)⁶⁾などが出され、主に西洋哲学や思想史の分野で行われてきた。しかしながら、教育思想史、幼児教育史の分野で記憶術が取り上げられることは管見の限りほとんどない。そこで古典古代より重要視されてきた記憶術を、教育・学習方法という視点から捉え、それが16世紀のエラスムスにどのように受容され、17世紀のコメニウスへと受け継がれていくことになったのかを明らかにしたい。

1. 古典時代の記憶術

「ルネサンス」とは、古典古代における学芸の再興を目指した文化的運動であり、そうした意味ではエラスムスもギリシア・ラテンの思想から多大な影響を受けている。本章では、記憶術とは何かということをおさえた上で、エラスムスの思想形成との関連を意識しながら、古典時代の記憶術に関する代表的な三作品とその特徴についてみていく。

記憶術とは、覚える事柄を「場所」(「トポス/場所」[loci])、順序/秩序[ordine]、イメージ(「能動的イメージ」[imagines agentes])を利用して自分自身のものとする技法である。「場所」は秩序立てられており、そこには覚えるべき事柄を連想させる「イメージ」が付いている。人は場所から場所へと移動しながら、それぞれのイメージと結びついた覚えるべき事柄を心の中に留めていく。また覚えるべき事柄を思い出す時も、この行程を心の中で辿ることによって、順序よく連想され、引き出されていくとされる⁶⁾。

このような心的観察に基づく行為を説明するのに最もよく引用されるのが、記憶術を最初に発明したシモニデス(Simonides of Ceos, B.C.556?-468)の話である。このギリシアの叙情詩人は、ある時

祝宴の席に招かれ詩を吟じていたが、席を外し外に出たところ大広間の屋根が崩れ落ち、多くの客人が下敷きになってしまった。しかし、シモニデスは列席者が座っていた場所を覚えていたため、損傷の激しい遺体をそれぞれの遺族に引き渡すことが出来たとされる。このように、どこに誰が座っていたのかという記憶を手繰り寄せて再生できたことが記憶術の始まりと言われている。

以下、古典時代の三作品、作者不詳の『ヘレンニウスに捧げる修辞学 第四書』(*Rhetorica ad C. Herennium libri IV*、以下『ヘレンニウスへ』と表記)、キケロ(Marcus Tullius Cicero, B.C.106-43)の『弁論家について』(*De oratore*)、クインティリアヌス(Marcus Fabius Quintilianus, 35?-100?)の『弁論家の教育』(*Institutio oratoria*)における記憶術の特徴をみていきたい。

(1) 作者不詳の『ヘレンニウスへ』(3.16.28-3.24.40)

これは、ローマの雄弁術教師が紀元前86年から82年頃、自身の生徒ヘレンニウスのために書いた教科書である。そこには、弁論のために最も必要とされる資質は記憶力であるとされ、記憶力には生来的なものと、訓練により向上されるものの二種類があり、記憶術を使うことによってどちらの記憶力も増進されるとある。また、記憶術は「諸々の場とイメージから成り立って」⁷⁾おり、「これらのものを秩序正しく配列すれば、その結果、それぞれの場に配したものは、それぞれのイメージによって思い出され、口に出して反復できる」⁸⁾とされ、秩序としてまとまりのある「場」を通りながら、そこに付随する「イメージ」によって記憶が呼び起こされると言う。

著者である雄弁術教師は、「場」の規則、「イメージ」の規則(「イメージ」の規則は、更に「言葉の規則」*memoria verborum*と「事柄の規則」*memoria rerum*に分かれる)を詳細に示しながら

ら記憶術を説明する。ここで注目すべきことは、「場」に充てられるイメージには、記憶に焼き付けられるほどに力をもったイメージ (imagines agentes) が強く求められたことだ⁽⁹⁾。

(2) キケロの『弁論家について』(2.86.350-2.88.360)

キケロは、シモニデスの話を引き合いに出しながら、記憶術について「この『記憶』能力を育みたい者は、一連の場を選定し、頭の中で、記憶したい事柄を意味するイメージを形づくり、これらのイメージをそれぞれの場に貯えておかなければならない。その結果、場の秩序が事柄を維持し、事柄のイメージが事柄そのものを表すこととなる。かくして、われわれは場とイメージを、それぞれ蠟引書板とそこに記された文字として、用いることとなる」⁽¹⁰⁾と述べている。ここでは、「場」が教材の一つとしての「蠟板」に置き換えられ、修辞学教育の基礎となる言葉の教育のために、「文字」がイメージと結びつけられている。更に、「人が備えるべきは程よく明るい、適度の間隔を置いて、程よく配された多数の場であり、また活力に満ち、輪郭のくっきりした、風変わりであると同時に、素速く魂に訴え、浸透する力を有するイメージ」⁽¹¹⁾とあるように、彼においては、秩序立てられた場と共に、『ヘレンニウスへ』でも強調されていたような人間の魂に与えるイメージの力強さが強調されている。加えて「われわれの心にもっとも完全な像が結ばれるのは、その対象が五感を通して心に伝えられそこに刻み込まれる場合である。だが、五感の中で一番鋭敏なのは視覚であるから、耳とか省察によって感知されたものは、さらに眼によってじっくりと心に伝達された場合にこそ、もっとも容易に記憶されうるのである」⁽¹²⁾と述べるなど、イメージの持つ強烈な力は、感覚器官の中でも視覚を通じて素早く簡単に心に刻まれうるとされた。

キケロは「古代ローマの建物の間を巡り、透徹した内なる眼をもって諸々の場を『見』、その場に貯えられた諸々のイメージを『見る』と即座に演説内容と語句を口に上らせえた」⁽¹³⁾とあるように、目からの刺激が魂に直接作用し、心の眼を啓くと信じ、またそれを実践した人でもあった。

(3) クインティリアヌスの『弁論家の教育』(11.2.1-51)

クインティリアヌスもまた記憶術を説明する際に、一軒の邸宅を例に挙げている。前庭、広間、雨水留めの周囲、寝室、談話室、そして立像や置物をも再生すべき記憶の印が革紐で結びつけられているように、家を周回することで記憶は蘇ってくるとした。「想像するか、実際の情景からとるか、ともかく場所と、もちろんわれわれが想像で造り出さなければならない写像(imago)や似姿(simlacrurn)といったものが必要である」⁽¹⁴⁾と述べている。

このようにヘレンニウスの著者、キケロ、クインティリアヌスが捉える古典的記憶術には、秩序ある場とイメージが伴っているという点で共通している。しかしながら、クインティリアヌスにおいては、こうした記憶術を「否定するつもりはない」としつつも、他の二人とは異なってそれを全面的に支持するような態度は見られなかった。例えば、キケロが信じ、世に広めたシモニデスの話に対しても懐疑的な見方を示しており、記憶のための方法を説明するのにあえてこの詩人の話を引き合いに出す必要はなく、自分たちの経験から説明しうるものとした⁽¹⁵⁾。また、実際的な問題として記憶術を実践することは、思い出すべき事柄や言葉のために無数の場所やイメージを用意しなければならず、労苦が多く非効率だと主張する。記憶術の実践者、成功者の体験談を眉唾ものと断じ、そうした特異な方法よりも一層現実的な方法

があるとした⁽¹⁶⁾。それは、覚えるべき内容をいくつかの部分に分け、番号をふり、順に思い出していく、或いは内容に即した印を用いるというものである。そして何よりも習慣になるまで暗唱を繰り返すこと、この訓練こそが最良の記憶のための方法だと説き、記憶術そのものに対して他の二人よりも距離を置いた態度を取った。

2. エラスムスと記憶術

(1) 秘儀的記憶術との対峙

ルネサンス期に入ると、イタリアの哲学者カミッロ (Giulio Camillo, 1480?-1544) が「記憶の劇場」(Theatre of Memory) を構想し、そのアイデアは死後『劇場のアイデア』(*L'Idea del Theatro*, 1550年) として出版される⁽¹⁷⁾。カミッロの劇場構想には、イタリア・フィレンツェで興隆した新プラトン主義の影響が見て取れるのだが、とりわけフィレンツェからヴェネツィアで特徴的となったヘルメス主義のカバラの教説が強く出ていていると言われている⁽¹⁸⁾。古典的記憶術の流れの中に、魔術的要素が加わったことは、ルネサンス期の記憶術を特徴付けることとなった。

そのカミッロが考えたのは、内部に49の扉がある円形の劇場である(図1)。劇場に入ることのできる人間に制約はなく、誰でも利用できるようなになっている。中に入ってから、神秘的体験をするということになるのだが、そこでは「劇場の中心にひとり観者が立ち、その周囲にイメージ化された天地創造の過程を体験する」ことによって、誰でも最終的に神と人間が一体化する「人間の神化」(*l'humana deificatione*) が起こるとされる⁽¹⁹⁾。カミッロの劇場は「旧約聖書に書かれた7日間の天地創造の過程を、古代記憶術におけるイメージとことばの循環的操作を応用することによって再現するイメージ装置」⁽²⁰⁾ と言えるものだった。

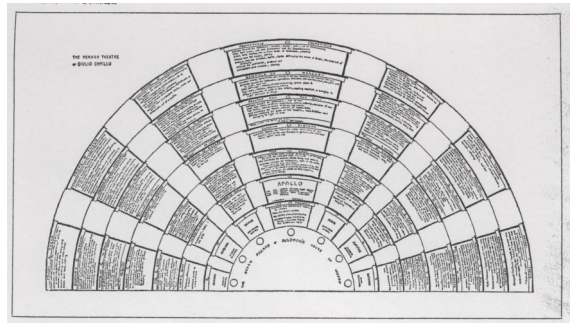


図1 カミッロの世界劇場構想図 (パオロ・ロッシ、『普通の鍵』、p.123.)

当時、フランス王フランソワ I 世 (1494-1547) の援助を得て、自身の考えを「実際」の劇場という形で建設することを目論んだカミッロにはヴェネツィアを中心とした熱心な支持者がいたが、その影響は、ヴェネツィアに留まることはなかった。1565年、フッガー家とバイエルンのアルブレヒト 5 世に仕えた医師サミュエル・キッヒェルベルク (1529-1567) が、カミッロを多く引用して『きわめて大きな劇場の銘文あるいは碑銘—この劇場は万物の特異な素材と重要なイメージを含んでおり、それゆえ正しくも、人為的で奇跡的な事物の、またあらゆる、宝物、貴重な調度、建造物、絵画の便覧とも呼ぶことができ、これらのものは不断に眺められ触れられることによって、即座に容易にまた確実に、諸事物についての格別な認識と驚嘆すべき知慮を獲得しうるために、劇場の中にもともに蒐集されるように諮られた』を出版している⁽²¹⁾。

他方、カミッロを大ぼら吹きだと冷笑し、彼の考えを疑い、批判する人々もいた。その先頭に立ったのがエラスムスである。クインティリアヌスから影響を受けた彼は、合理的な見方をもってカミッロの隠秘哲学に鋭く反論した。1508年、『格言集』第3版 (*Adagiorum chiliades tres*) を出版しようとヴェネツィアに滞在していたエラスムスは、カミッロと初めて出会い、同じ宿に泊まっていたことがある⁽²²⁾。この時、両者の間でどのよ

うな会話が交わされたのかは明らかになっていないが、それから 20 年後、エラスムスは『キケロ派たち、あるいは理想的なラテン語様式をめぐる対話』(*Dialogus, cui titulus Ciceronianus, siue, de optimo dicendi genere*, 1528 年)の中で、カミッロのカルト的信仰に基づいた迷信的行為に疑問を呈している⁽²³⁾。1532 年には、試作品のような劇場を実際に見たという盟友ツィケムスから、小さな木造の劇場は 1 人か 2 人位がやっと入れる大きさで、その中には秘学的知識への鍵とされる図像と引き出しの付いた箱が置かれてあったとの報告を受ける。しかしエラスムスは、秘儀的要素を帯びたカミッロの記憶術に対して最後まで批判的見解を撤回することはなかった。なおまたカミッロは記憶の劇場構想以外にも、『トピカ (トポス論)』を著し、そこで修辞学的像の秘密を明らかにし、それを容易に再現できる近道の方法を提示している⁽²⁴⁾。いずれにせよ、エラスムスにとっては、カルト的色彩の下で記憶が容易に可能になるなどという非合理的方法は到底受け入れられないものだった。

(2) ノートへの記録法

エラスムスは全ての学知が神秘的な働きによっていとも簡単に修得できるかのようなカミッロの記憶術を受け入れることはなかった。学識ある者になるためには近道はなく、何よりも人間自身が自らの力で努力することが大事であるとしたのである。

『対話集』(*Colloquies*)に収められている‘*Ars Notoria*’(*Ars of Learning*: 1529 年)は⁽²⁵⁾、1522 年にエラスムスが友人であるフローベン (Johann Froben: 1460?-1527) の息子「エラスミウス」に宛てて書いたものである。当時流行っていた、最小限の苦勞で全ての自由学芸を容易にわが物にすることができる方法を習得したいと願う 13 歳のエ

ラスミウスに対して、「デシデリウス」は、「鍊金術でお金持ちになった人に会ったこともないし、これからも会わないだろう」、学問もそれと同じで「努力、専念、根気強さ以外の学習方法はない」と対話の中で論した。

エラスムスは、記憶力を補強するために、怪しげな記憶術の代わりにノートに「記録すること」(*recording*)の重要性を説く。『言葉と内容の豊かさについて』(*De Copia*, 1512 年)⁽²⁶⁾では、著書を読んでいる際に出くわしたものの、特にそれが気になるものであるなら、すぐにノートに取るように勧めている。しかしこれらは、単に書き留められた状態のままにしておくのではなく、逸話、寓話、実例、奇妙な出来事、格言、機知に富んだ見解、その他特筆すべき見解、ことわざ、隠喩、直喩といったように、見出しを付け、関連付けて整理されなければならなかった。そうすることで、書くべき内容、話すべき内容全体の構成を考える上で使えるトピックや引用を自由に操れるようになるという。同様に『学習方法論』(*De Ratione Studii*, 1511 年)においても、教師の言っている内容をすべてノートに書き留めるのではなく、整理してノートを取るように説いている⁽²⁷⁾。更に『子どもの教育について』(*De Pueris*, 1529 年)では、覚えるべき対象を徹底的に理解し、理解したことを順序正しく整理して、そして最後には思い出すとすることを繰り返して反復することとした⁽²⁸⁾。このような方法は、クインティリアヌスを想起させる。先述したように彼は、記憶を補強するための有効な学習方法として、覚えるべきテキストの内容を構造化し、見出しとなるべき箇所印をつけ、それらを順序よく暗唱するといった努力を伴う訓練を推奨していたからだ。エラスムスにおいては、その方法を更に発展させ、整理した形でノートに記録していくことを提唱したのだが、これは「当時としては革新的な発想」⁽²⁹⁾だった。

(3) エラスムスの庭

では、エラスムスはノートに書き留めるといった以外の方法を認めることはなかったのだろうか。『対話集』の「敬虔な饗宴」⁽³⁰⁾ (*Civivium Religiosum*, 1522年)には、家の主である「エウセビウス」と招かれた客人が、主人の家の庭を通りながらさまざまなイメージと出会い、そこから発せられる聖句や格言に関して、対話をしながら信仰を深めていく様子が描かれている。以下、その一部を紹介しよう。

客人たちは、玄関で迎えられ、庭へと誘われる。前庭の扉には、古代ギリシア・ローマの神話に登場するメルクリウス、ケンタウロスが描かれており、聖書から引用された三つの句（「マタイによる福音書」(19:17)はラテン語、「使徒言行録」(3:19)はギリシア語、「ハバクク書」(2:4)はヘブライ語で）も刻まれていた。一行はこうした聖句を読みながら庭を進んでいく。右手にはイエス・キリストの像が置かれた小さな祭壇があり、祈りを捧げるようになっていた。更に奥に行くと肉体と魂を清められるための噴水が見えてくる。やがて、ハーブの花壇まで来るのだが、それらは種類ごとに植えられ、それぞれに札が立てられていた。例えば、マジョラムの札には「出ていけ、豚よ。私はお前のために香っているのではないのだから」（『格言集』I iv 38）と書かれている。主人の案内は回廊へと続く。敷石や壁面には、陸上の珍しい生き物から水生生物まで、或いは薬草や毒草といったもののまで、この世のあらゆる動植物が色とりどりに描かれていた。サソリがギリシア語でテオクリトスの叙情詩から引用された言葉「神は罪を見つけ出された」（『格言集』II vi 11）と言っているように、描かれているもの全てが何事かを「語りかけている」のだった。いよいよテーブルまで到着し、饗宴が始まると、客人が主人に「ワインの盃は何と言っているのでしょうか」と尋ねる。主人は「自

業自得だ（深酔いをして体を壊すのはワインのせいではなく、ワインを飲んだ者の責任だ）」（『格言集』III vi 34）と言っていると言い、他の客人は「私の盃は『ワインの中に真実はある』と言っています」（『格言集』I vii 17）と答えるのだった。

このように、エラスムスの庭には全知がトピックごとに配置され、そこを訪れた人は、場に配された言葉を伴ったイメージから道徳的教訓を想起し、人としてのあるべき姿とはどのようなものなのかについて、対話を通して考えを述べ合い、照らし合わせ、徳、信仰心を確たるものにしていったのである。こうした行程は、カミッロが構想したような、場とイメージを通して神的合一が図られる神秘体験というものとは全く異なる。エラスムスの捉えた理想の庭には、理性的な判断をもって原典を校合していく、いかにも言語文献学者らしいキリスト教的人文主義者による記憶術の捉え方が表れていると言えよう。（現在ベルギーのブリュッセルにあるエラスムスハウスには「敬虔な饗宴」から着想を得た「薬草園」と「哲学の庭」が造られている。図2）



図2 エラスムスの庭 (ERASMUS HOUSE ホームページより)

(4) 文字と図像の視覚的結合

エラスムスの記憶術においては、特に言葉と図像（イメージ）とを結びつけることが強調されている。例えば、『学習方法論』では、記憶の方法として、先述したように、心に留めておくべき対象を根底から理解し、整理して再現し、注意力をもって繰り返し暗唱することを勧める一方、覚えるべき言葉を「美しく簡潔に図表に清書して寝室の壁にでも貼っておくこと」や「警句や格言や命題などのように短くて気の利いた表現があったら、それぞれの書物の冒頭や末尾に書き抜いておくこと」、その他、指輪、酒盃に彫り込むこと、門口や壁の上、あるいは窓ガラスに書き記しておくことも悪い方法ではない、と説いている⁽³¹⁾。『学習方法論』は本来、エラスムスの親友ジョン・コレット（John Colet, 1467-1520）が創設した聖パウロ学校の教師用手引き書として執筆されたものであったが、聖パウロ学校の教室の出入り口にも「これに聞け」（マルコ 9:7）という聖句が書かれていた。

また『格言集』では、「ゆっくり急げ」（Festina lente）という諺について「あらゆる柱に刻まれ、すべての教会の門の前に金の文字ではっきりと書きつけられ、君主たちの宮廷の扉に描かれ、高位聖職者たちの指輪に刻み付けられ、王の笏に彫られ、つまりはあらゆる公の建造物において、表示され、宣伝され、称賛され、あたかも常にただ人の心にも強く思い浮かばれるものとして、いつも人の目に触れるようにすべきである」と言っている⁽³²⁾。エラスムスは、クインティリアヌスの方法を発展させた現実的かつ革新的な方法と共に、キケロが強調したように、視覚に訴える方法も併せて取り入れるべきだとしたのである。

なおまた、自分の判断で適切な言葉などを抜粋し、整理することが出来ない幼い子どもたちに対しては、後者の方法を積極的に勧めた。『子ども

の教育について』では、寓話や物語の内容を絵に描いたり、他の題材、樹木、草木、生き物の名前などあらゆる事柄（それらは、必ずしも子どもたちの身近にはいるとは限らないサイ、シカ、ペリカン、インド・ロバ、象なども含めて）も図絵にすることによって、子どもたちは喜んで学び、また正しく覚えるものであるとした。優れた教師とは、クッキーのように子どもが好きな菓子で文字の形を作り、文字の名を言い当てると褒美として与え、その文字菓子を食することが出来るように工夫したり、アルファベットの形をした象牙を作って、子どもたちに遊ばせながら自然と覚えさせるものだ、とも述べている⁽³³⁾。

このような、修辞学教育に本格的に入る前の子どもに向けた文字の学習についてであるが、実のところやはり、キケロの視覚に訴える方法を冷静に取り入れたクインティリアヌスからの多大な影響があった。それは、子どもの発達を大事にしながら、学習意欲を削ぐことなく、遊びやゲームを取り入れ、無理なく学習させようとする考えである。子どもたちは、自然の歩みに沿って楽しみのうちに学習を進め、文字を理解した後は、溝のようになっている文字のくぼみを筆で何度もなぞり、徐々につづりの練習へと移っていく。そうして初めて、何度も反復しながら記憶していき、つづりそのものから語をまとめあげ、語から文を構成していくようになる、とクインティリアヌスと言う⁽³⁴⁾。その際、教師は決して子どもをせき立てることはしない。

エラスムスの記憶術は、ルネサンス期哲学を特徴とする記憶術というよりも、むしろ古典的記憶術を再興、発展させたと理解することができる。それは、人間自らの努力と訓練によって学習を進めるという合理的な方法を最適なものとしつつも、自由意思をもつ人間の主体性や尊厳を損なわないという限りにおいて図絵を用いた記憶術をも

取り入れたと言うことである。

3. コメニウスの『世界図絵』へ

16世紀の半ばを過ぎると、蒐集主義の下、記憶術はあらゆる事柄を普遍的知識として体系化し、同時に図像、系統樹、系統図という形で可視化する方法へと変化していく⁽³⁵⁾。印刷術の発明以降、書籍が刊行される時代にあつて、記憶されるべき全ての事柄がページ上に秩序をもって空間的に配置されていくようになった⁽³⁶⁾。ジョルダノ・ブルーノ (Giordano Bruno, 1548-1600) は、「自然の世界の諸原理と人間の世界の諸原理とを図像化し、それらを体系的に配置する百科全書的な知」⁽³⁷⁾を構築し、オラツィオ・トスカネッラ (Orazio Toscanella, 1520?-1579) は、1569年に執筆した学校用の手引き書『あらゆる主要な修辞家たちの織りなす調和』 (*Armonia di tutti I principali retori*, Giovanni Varisco, Venezia, 1569年)の中に「徳の系統樹」 (alberi delle virtu) を示した。

そうした中、情報を整理することによって、トポスのシステムを一層洗練化させ、想起という行為を合理的に容易せしめる方法の土台を築いたのがエラスムスだった⁽³⁸⁾。『言葉と内容の豊かさについて』や『学習方法論』で推奨された抜粋術 (ars excerptendi) は、常套句集『格言集』に昇華される。この方法が人文主義者の間で広まり、数々の印刷版常套句集 (commonplace-book) となって著され、百科全書主義の思潮と融合していくことになる。「知識の混沌の集積をかきわけ、普遍的な知へと導いてくれる最短の道を探究する営み」が人文主義的方法として提示されるようになった⁽³⁹⁾。「普遍の鍵」 (clavis universalis) に対する探求の時代が始まったのだ。

エラスムスの『学習方法論』を読み、そこに自ら序を付し1652年に再版したコメニウスは、『世界図絵』と『大教授学』 (*Magna Didactica*, 1657年) を著す。『大教授学』には、タイトルと共に「すべての人にすべての事柄を教授する普遍的技巧を提示する」 (*universale omnes omunia docendi*

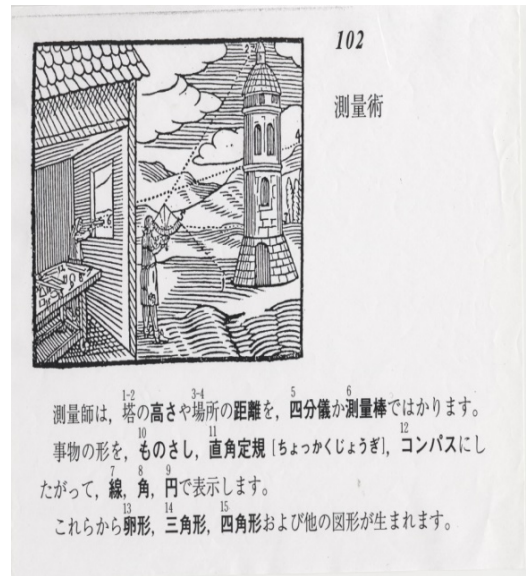
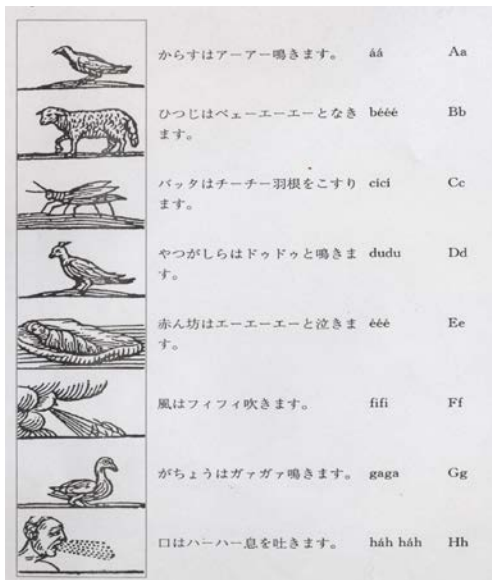


図3 コメニウスの『世界図絵』 (J.A. コメニウス、井ノ口淳三訳『世界図絵』、p.8、p.112。)

artificum exhibens) との言葉が付けられた。また『世界図絵』は、汎知主義の下、世界における主要な事物のすべてと人生における人間の諸活動を体系的に編みなおし、命名し、図絵を用いて指し示したものである。エラスムスの影響を受け、幼い子どもたちの視覚に訴えることで、楽しく無理なく習得してもらおうと考えたのだった。彼は、「感覚に対して示された、事物に関する私たちのこの小さな百科全書によって今や容易に進んで行くことができるでしょう」⁽⁴⁰⁾ と述べている。

他方、コメニウスには新プラトン主義的神秘思想の影響が認められる。『世界図絵』には、カバラの神秘伝達技法が示され⁽⁴¹⁾、カンパネッラ (Tommaso Campanella, 1568-1639) の『太陽の都』 (*Civitas solis*, 1623 年) から着想を得ているとも言われる⁽⁴²⁾。この点から見れば、彼が必ずしもエラスムスの思想を全面的に受け継いだ訳ではないことが分かる。ただし、最近の研究では、コメニウスの教授法も、「生ける印刷術」と言われているように、人間存在に対して知覚されるものの単なる受取手に留まらない捉え方がされており⁽⁴³⁾、意思をもった人間による主体的な働きかけを重視するエラスムスの見方に寄っていたと言えよう。

おわりに

ルネサンス期はギリシア・ラテンの文化を再興したと言われるように、基本的には 16 世紀を代表する人文主義者エラスムスの記憶術もここに原点をみる。彼は、キケロのようにイメージから発せられる記憶への作用がある程度は認めつつも、クインティリアヌスが主張したように人間自らの経験、行為による記憶のための作業との調和的併用の立場をとる。

このことは第 2 章でみたように、カミッロとの論争、ノートへの抜粋・記録・整理法、エラスム

スの庭、イメージの視覚的利用から分かる。人間の主体性を重んじるエラスムスにあっては、カミッロの秘儀的方法は受け入れられるものではなかった。理性に基づき、あらゆる事柄をトピックに沿って自らの判断で抜粋し、ノートに整理し、繰り返し暗唱することは、神的合一を図ることで学知への近道を約束すると標榜したカミッロの方法とは相いれない。文字とイメージが配置されたエラスムスの庭においてさえ、教養ある人間同士がそれぞれの見解を突き合わせ、聖句や格言の背景にある意味を突き止めていこうとする過程が丁寧に示されていた。エラスムスが視覚を利用するのは、人間の学習意欲を削がない、すなわち神や善に向かっていこうとする人間本性を支える補助的役割を担う限りにおいてであった。

エラスムスの考えは部分的にコメニウスに受け継がれる。両者の教育方法を記憶術という視点から照射したことによって、コメニウスがエラスムスの何を受け入れ、何を受け入れなかったのかという点が浮き彫りとなった。このことは、従来の研究では必ずしも十分に検討されてこなかったことだ。『世界図絵』には、エラスムスの視覚教育が採り入れられている。また、エラスムスが推奨したノート法は、図らずも普遍的な知の効率的な教授方法の素地を作った。

他方、コメニウスにはエラスムスとは異なって新プラトン主義的神秘思想が認められる。ただし、それは学びに対する人間の能動的姿勢を否定するものではなかった。

以上、教育方法としての記憶術が、いかにエラスムスに受容され、コメニウスへと受け継がれていったのかについて見てきたが、コメニウス自身が記憶術に関してどのような言及をしていたのか、或いはエラスムスの『学習方法論』の序には何を書いたのかなど取り上げることが出来なかった。今後の課題として別稿で改めて検討したい。

註

- (1) 井ノ口淳三、大田光一、大川洋「エラスムスとコメニウス：『言葉と事物』の方法をめぐって」2012年、71巻、p.76f. 日本教育学会大会、第71回、ラウンドテーブル1研究発表要旨。
- (2) フランセス・A・イエイツ、玉泉八州男（監訳）『記憶術』水声社、1993年。
- (3) パオロ・ロッシ、清瀬卓訳『普遍の鍵』国書刊行会、2012年。
- (4) メアリー・カラザース、別宮貞徳（監訳）『記憶術と書物—中世ヨーロッパの情報文化』工作舎、1997年。
- (5) リナ・ボルツォーニ、足達薫、伊藤博明訳『記憶の部屋 印刷時代の文学的一図像学的モデル』ありな書房、2007年。
- (6) 同書、p.13。
- (7) イエイツ、前掲書、p.27。
- (8) 同書、p.27。
- (9) 同書、pp.31-32。
- (10) 同書、p.22。
- (11) 同書、p.41。
- (12) 同書、p.24。
- (13) 同書、p.24。
- (14) クインティリアヌス、小林博英訳（『弁論家の教育2』梅根悟・勝田守一（監修）『世界教育学選集』）明治図書出版、1981年、p.88。
- (15) クインティリアヌス、前掲書、p.89。
- (16) 同書、p.90。
- (17) ジュリオ・カミッロ『劇場のアイデア』ありな書房、2009年。
- (18) イエイツ、前掲書、p.197。
- (19) ジョリオ・カミッロ、前掲書、p.352。
- (20) 同書、p.351。
- (21) リナ・ボルツォーニ、前掲書、pp.355-357。
- (22) *Contemporaries of Erasmus*, Vol.1, pp.248-250.
- (23) *Collected Works of Erasmus* (以下CWE) 28, p.384, p.477, pp.543-544.
- (24) リナ・ボルツォーニ、前掲書、p.12。
- (25) CWE 40, pp.931-934.
- (26) CWE 24, p.638.
- (27) CWE 24, p.691.
- (28) CWE 26, p.340.
- (29) CWE 40, p.931.
- (30) CWE 39, pp.171-243.
- (31) CWE 24, p.671. (邦訳：二宮敬訳『エラスムス』講談社、1984年、p.205。)
- (32) 柳沼正広「エラスムス『格言集』から「ゆっく
- り急げ」翻訳と解題」(『創価大学人文論集』第22号、創価大学、pp.217-218、2010年3月)。
- (33) CWE 26, pp.337-339.
- (34) クインティリアヌス、森谷宇一・戸高和弘他訳『弁論家の教育1』京都大学学術出版会、2005年、pp.20-21。
- (35) リナ・ボルツォーニ、前掲書、pp.42-44。
- (36) 同書、p.357。
- (37) 伊藤博明（責任編集）『哲学の歴史4』中央公論新社、2008年、pp.522-524。
- (38) 桑木野幸司『叡智の建築家—記憶のロクスとしての16-17世紀の庭園、劇場、都市』中央公論美術出版、2013年、pp.322-324。
- (39) 同書、p.340。
- (40) J.A. コメニウス、井ノ口淳三訳『世界図絵』ミネルヴァ書房、1988年、p.5。
- (41) 同書、pp.188-189。
- (42) パオロ・ロッシ、前掲書、pp.246-248。
- (43) 相馬伸一『コメニウスの旅〈生ける印刷術の四世紀〉』九州大学出版会、2018年、p.255。

Acceptance and Development of Ars Memorativa as an Educational Method - with focus on Erasmus

Natsuka OKAWA

【abstract】

Ars memorativa (the art of memory) as a part of rhetoric has a long history in the West. In the historical study of Western education in Japan, ars memorativa has not attracted much attention so far. This paper outlines the history of ars memorativa as an educational method with focus on Erasmus. Cicero's ars memorativa was critically accepted by Quintilianus, whose method was developed to Erasmus. On the other hand, Erasmus had a controversy with Camillo who was a 16th century Ciceronian and a Neo-Platonist. The controversy between the two aroused interest in ars memorativa during the Renaissance period. Their thoughts can be seen in Comenius' *Orbis pictus* which is the first text-book with illustrations for children.

【key words】

Easmus, Comenius, ars memorativa, visual educational materials for children